

戦争の悲惨さ

前橋大空襲を

爆弾の破片降る中、走り続けて

反町 久美子さん(石倉町一丁目)

わたしが八歳、今も忘れられない八月五日、夜九時ごろのことでした。警戒警報のサイレンに目が覚め、枕元の洋服に着替え大切な物の入ったリュックを持ち、妹を背負いながら弟の手を引く母に連れられ外へ。いつもは榎町(現在の千代田町四丁

目)にあった家の防空壕に父だけ残るのですが、この日は一緒に清王寺町(現在の日吉町一丁目)の叔父の家へ逃げることに。どこも慌ただしで殺気立ち、叔父の家の防空壕にも入れてもらえず、「東へ逃げろ」という声に従って、歩いて行きました。

B29の爆音轟く空から、焼夷弾の破片が雨あられのように降ってきます。逃げ惑う人の中、父の手につかまり夢中で走りまし

た。桑畑に着き父を見ると、左腕四力所を破片が貫通。母が震えながらわたしのぜんそくの粉薬を見つめ、振り掛けますが、助からないと思つたのか「父と死のう」と隣の水田へ向かったのです。爆弾片を受けて苦しむ妊婦さんが、二人の幼な子に自分を置いて逃げるよう急ぎ立てますが、「いやだ」と泣き叫ぶばかり。聞こえてくる声に震え、泣きながら水田に入りました。

すると、空襲警報解除のサイレンが聞こえ、静かになった空からきれいに光る細長い物がたくさん降ってきたのです。近く



の農家の助けを借り端気町の親せきへたどり着くと、もう朝でした。その後も父は治療を受けられず、夏の暑さに傷は膿み、うじがわきました。それを母が一つずつ取り、消毒していた姿が忘れられません。あれから六十年たった今、戦争のない世の中になることを願うばかりです。

いつまでも語り継いで 記憶が薄れないうちに

三人のインタビューを行ったのは、七月二日から十七日まで総合福祉会館で開催された「長崎原爆被災展」の会場の一角でした。

長崎に原爆がさく裂した十一時二分を指したまま止まった時計や熱で変形した牛乳瓶などの資料三十点、長崎原爆資料館所蔵のパネル七十



展示品を見る来場者たち

枚を展示。長崎原爆被災者が、恐ろしい体験を来場者へ直に語る催しもあり、多くの皆さんが

聞き入っていました。また、同じ会場内に前橋大空襲のパネル展も同時開催。今回紹介した三人の証言ビデオも上映されていました。会期中、子どもからお年寄りまで、幅広い年齢層の人たちが訪れ、深い感銘を受けていたようです。

終戦から六十年を経て、戦争を知らない世代がますます増える中で、人々の心に原爆や戦争の記憶が薄れてしまわないように、取り組まなくてはなりません。「忘却は戦争や原爆の肯定につながる」ことを、わたしたち一人ひとりが認識することが大切。事実を知り、それを語り続けていく努力を重ねていきましよう。

蔵など一部の建物を残し焼け野原となった市街地